

「資本主義の父」の言、投信に生かす

顧客の男性からメールが来た。「娘が生まれた。投資信託を買って三十年後にプレゼントしたい」。思いが通じたと感じた。

投資コンサルティング会社を経営する洪沢健（47）は一月、個人向けの株式投資信託を立ち上げた。投資方針は「三十年後に社会の役に立っているような会社を、株を買って応援する」。当面の株高を先取りする多くの投信と一線を画す。

企業の公共性にこだわるのは古巣のウォール街が引き起こした金融危機の反省

洪沢 健さん(47)

拓くひと

からだ。「クルマがスピードを競っているようなもの。誰との速度差がないから危うさに気付かない」。短期の収益を頼る投資ブームはバブルを生み、資本市場という公器まで壊した。「視野が狭くなって社会が見えなくなったんですよ」ある名文句と重なる「経営者一人が大富豪になって

企業の公共性「30年先」見る

も、そのために社会の多数「ゆ」。明治から大正期、五父、洪沢第一の言だ。が貧困に陥るようなことで、百社を超える企業や銀行を、健は栄一の孫の孫、高祖は、正常な事業とは言われ、創設した日本の資本主義の父の発言や生き様を講演な



とを通じて語り継ぐ。「栄利益を上げる商才ではない。日本を世界に理解して託者と位置づけた。株価が下けたのに巨額の報酬を得るウォール街のトップをいさめたことでしょうか」

長期的な視点に目覚める。一年に起業、今、トレーダー時代を振り返る。「栄年あまりトレーダーとして米投資銀行やヘッジファンドに勤務。上役は「おれたちは慈善家じゃない」と目先の収益を求めた。

「そつたるるか」。いつも心に何かが引っかかっていた。下敷きは大学卒業後、国際交流を促す非営利団体で働いた経験。接する機会があったソニー創業者、盛田昭夫に見たのは短期的な。この連載は随時掲載します。

文 編集委員 桐原誠
写真 今井拓也